大学生における関係的自己の可変性と共感経験及び自意識との関連

Variability in the Relational Self Related to Empathic Experience and Self-Consciousness in University Students

池　江　咲　耶

序論

１．自己の可変性の研究動向と課題

われわれは、いつでも単一不変の自己を表現しているわけではなく、状況や対人関係に応じて自己を多面的に変容させている。これを関係的自己（Curtis, 1991；佐久間, 2000）という。関係的自己は、自己の多面性を示す概念であり、可変的で多面的な自己として捉えられる。この可変的で多面的な自己については、様々な観点から多くの理論や知見が提示されており、代表的なものに、パーソナルコンストラクト理論（Kelly, 1955）や作動自己概念（Markus&Wurf, 1987）などがある。作動自己概念とは、内蔵する自己知識のうち、その時にアクセス可能性が高い側面を有する自己概念が現れるという考え方である。内的状態や社会的環境の変化による個人の経験が変化するに伴い、アクセス可能な領域が異なり、現れる自己も異なる。自己の一貫性と可変性を矛盾なく説明しうる概念とされている。また、コンストラクトとは、事象間の類似性や差異を認知することで形成される構成概念であり、人間はこれらの構成概念により、事象を予想しようと試みる。個人の構成概念の独自性をパーソナリティとして扱ったのがパーソナルコンストラクト理論であり、この概念をもとにしたLinville（1985）の自己複雑性モデルは、自己についての知識は複数の領域から認知的に表象されており、その分化の程度には個人差があると想定しており、自己の多面性を説明しうるモデルである。

佐久間・無藤（2003）は、従来の研究では、自己が関係に応じて多面的かつ可変的であるということが暗黙のうちに前提とされており、なぜ関係に応じて自己が変化するのかという変化に影響する要因については検討されていないことを指摘した。佐久間（2002）では、大学生女子の約90％が関係に応じて自己が変化すると自覚していることが明らかにされている。この結果は、日本を含む東洋文化圏において、自己を他者との関係の中で捉える傾向が強いという相互協調的自己観の影響を強く反映したものだと考えられる（Markus&Kitayama, 1991）。このように、日本人は他者との結びつきを重視するために、関係に応じて自己が変化しやすい。こうした環境も、変化の程度のみに着目するのではなく、演技や隠蔽といった印象操作的な動機や、変化に対して肯定的か否定的かといった意識についても捉える必要性を示すものとなっている。佐久間・無藤（2003）は、そうした考えに基づき、変化動機尺度を作成し、変化程度や変化意識との関連を検討している。

しかし、この変化動機尺度は、自らの変化について反省的に判断を求めているため、自己の変化を生み出す際の動機だけでなく、そ

うした振る舞いをした結果についての評価など、事後的な要因が影響していると考えられ、なぜ関係に応じて変化するのかに関わる要因としては不十分ではないかと思われた。また、従来の関係的自己の研究で取り上げ比較されているのは、比較された研究自体が数少ないものの、母親と友人や、親しい友人と初対面の人物や、両親と友人と恋人など多岐にわたるが、父親を対象に含め比較した研究は圧倒的に少ない。大学生の自己開示傾向に関する研究において、同性の友人、異性の友人、母親、父親を比較し、男女とも同性の友人に対する自己開示度が最も高く、父親に対する自己開示度が最も低いということ（榎本，1987）や、大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティに関する研究において、男性のアイデンティティには父親への同一視と母親との対立が関連しており、女性のアイデンティティには父親との関連がなく、母親との関連が強いということ（山本・岡本，2008）からは、大学生において、父親、母親との関係性は異なると考えられる。

よって、関係に応じて変化する自己に影響している要因を探ることと、比較対象に父親を含め、母親との変化の違いを検討していくことが今後の課題となっていくだろう。

２．共感経験

作動自己概念によると、想起した相手が異なれば、アクセス可能な領域が異なり、現れる自分自身についてもっている知識やイメージである自己概念も異なる。アクセス可能となる領域についての研究は少ないが、自己概念は、自己に関する蓄積された情報に基づいて構成されており、自らが過去に経験した事実に関する知識によって、自分が何者であるかという一貫した感覚を持つことができることから、想起した相手によってアクセス可能となる自己概念の領域は、過去の経験に依るところが大きいと考えられる。そこで、本研究では、過去の経験として、共感経験を取り上げる。

共感性とは、複数の要素からなる多次元的概念であり、共感を扱う心理学者の間で共通する定義はいまだ存在していない。これまでの研究では、他者の感情を感じる点に重きを置く感情的アプローチと、他者の感情を認知する点に重きを置く認知的アプローチに大別され、さらにそれらを結びつけて共感を理解しようとする流れにある（角田，1993b）。

角田（1991）においては、共感は「能動的または想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」と規定概念化されており、自己と他者の個別性の認識が確立されていることによって、共有体験が他者理解につながると考える。他者理解につながらない共有体験が同情であり、共感経験尺度（EES）では、同情反応と共感反応を識別しにくいという問題点が残っていたため、角田（1994）において、EESを改良した共感経験尺度改訂版（EESR）が作成された。EESRでは、同情者は自己中心的な自他認識を行い、共感者は個別性の認識が高く、両者では自他の個別性のあり方が異なると考え、他者の気持ちがわからなかったという経験、つまり共有不全経験を測定することにより、共感と同情の識別を試みた。他者との共有経験が得られない体験は、個としての自他の区別をはっきりと主体に認識させることになり、自分と他者は異なるのだという個別性の認識を高めるので、個別性の認識が高い共感者においては共有不全経験を意識できるが、自己中心的な自他認識を行う同情者においては共有不全経験そのものが意識されにくいと考えられた。EESRは共有不全経験といったEESの改善点に加え、共感的な内容は社会的に望ましいと考えられ、偽りの反応の可能性の効果を除くことを目的に、過去の経験という制約を設けている点を引き継いでおり、過去の共感経験を２側面からと

らえることができると考えられる。想起した相手との過去の共有経験が多ければ、アクセス可能な自己概念の領域は広く、共有不全経験が多ければ、アクセス可能な自己概念の領域は狭まると仮定できるであろう。

３．客体的自覚

また、現れている自己概念が異なれば、客体的自覚状態の生じ方も異なると考えられる。他者に見つめられた時、鏡に自分を映してみる時、私たちは多かれ少なかれ自分自身に注意が向く。Duval&Wicklund（1972）はこの状態を自己に注意が集中した状態（self-attention）と定義し、自己客体視理論（Objective Self-Awareness Theory）として体系化した。客体的自覚状態つまり自己に注意が集中した状態が、個人の自己評価や社会的行動に影響を及ぼすことを実験的に示しているDuval&Wicklund（1972）。想起した相手によって現れるそれぞれの自己概念におけるアクセス可能な領域が異なるため、同じ刺激によって客体的自覚状態を促されても、ある自己概念ではその刺激に関する知識や過去の経験が存在しており、アクセス可能な領域内であるため客体的自覚状態に陥るが、その刺激に関する知識や過去の経験が存在していない自己概念であれば、アクセス可能とはならず、客体的自覚状態には陥らない可能性が考えられる。

しかし、客体的自覚状態つまり自己に注意が集中した状態になりやすい人とそうでない人が存在し、それぞれの個人の持つパーソナリティ要因も考慮しなければならない。Fenigstein, Scheier, &Buss（1975）は、客体的自覚には個人差があるとし、一時的に内的な状態である客体的自覚とは区別して、自己に意識を向ける傾向である性格特性を自意識（self-consciousness）と呼び、自意識の強さの個人差を測定する尺度構成を試みた。その結果、私的自意識と公的自意識、対人不安の三つの因子を見出した。対人不安は、公的自意識と密接な関連が示唆されているが（Buss, 1980）、私的自意識、公的自意識とは、やや意味の異なるものと考えられ、自意識尺度において重要とされるのは、私的自意識と公的自意識である。私的自意識は自己の内面に対する注意であり、私的自意識が高い人は個人的基準を重視する傾向があること（Fenigstein, 1979）や、その時々での自分の意見、態度を自覚しているため、態度と行動との間の一貫性が高いこと（Scheier, 1980）などが指摘されている。また、公的自己意識は自己の外面に対する注意であり、公的自意識が高い人は社会的基準を重視する傾向があること（Fenigstein, 1979）や、他者の目を意識して自己表出の仕方をコントロールする傾向の強いこと（Scheier, 1980；Caever&Humphries, 1981）などが指摘されている。このように、自意識の強さや注意の向け方によって特徴的な行動様式を持つことが示されている。

目的と仮説

本研究の目的は、大学生の関係的自己の可変性に影響を与えている要因として共感経験との関連を検討することと、関係的自己の可変性に影響を与える個人差として自意識との関連を検討することとする。

想起した対象ごとに客体的自覚状態を測定することで、ある刺激に対するそれぞれのアクセス可能となっている自己概念の領域が異なっていると考えることができると思われる。ある刺激に対して、測定した客体的自覚状態が高まっていれば（本研究では、数値として客体的自覚状態を測定するため、以降、客体的自覚状態の数値が高い状態を客体的自覚状態が高まっている、と定義する）、アクセス可能な領域である自己概念には、その刺激に関する知識や過去の経験が含まれていた

と考えられるだろう。測定した客体的自覚状態が低ければ、その刺激に関する知識や過去の経験が含まれていなかったと考えられるだろう。本研究では、想起する対象として母親、父親、親友あるいは一番親しい友人（以降、「親友」と表記する）を用いるが、この３者では現れる自己概念が異なり、同じ刺激を与えられても、アクセス可能な領域が異なるために自己概念が異なり、客体的自覚状態の生じ方は異なると考えられる。よって、仮説①は、「父親が相手の時よりも母親や親友に指摘を受けた時の方が、自己に注意が向きやすい」である。この仮説が支持されれば、想起した相手によって異なる領域が自己概念として現れていると考えられる。また、測定した客体的自覚状態が低いということは、自己概念のアクセス可能な領域に刺激に関する知識や過去の経験が存在しなかったために客体的自覚状態に陥りづらかったか、そもそもパーソナリティ要因として自己に注意が向きづらかった可能性が考えられる。よって、仮説②を「パーソナリティとしての私的自意識が高ければ（本研究では、数値として測定するため、以降、自意識の数値が高い状態を自意識が高まっている、と定義する）、私的客体視場面で自己に注意が向きやすく、公的自意識が高ければ、公的客体視場面で自己に注意が向きやすい」とし、客体的自覚状態の生じ方とパーソナリティとしての自意識の関連を検討する。

また、共感経験について、個人の特性としての共感経験を測定した研究はあるが、対象ごとの共感経験を測定している研究が少ないことから、仮説③として「共有経験においては、女性は、父親に比べ母親や親友の方が共有経験が多く、男性は、母親に比べ父親や親友の方が共有経験が多い」、仮説④として「共有不全経験においては、女性は母親や親友に比べ父親の方が共有不全経験が多く、男性は、父親や親友に比べ母親の方が共有不全経験が多い」という対象間の共感経験の検討も行う。自己概念のアクセス可能な領域は、過去の共感経験と関連があり、過去の共感経験が多ければ自己概念についてのアクセス可能な領域は広く、共有不全経験が多ければアクセス可能な領域は狭まると考えられる。よって、仮説⑤は、「共有経験が多い対象ほど自己に注意が向きやすい」、仮説⑥は、「共有不全経験が多い対象ほど自己に注意が向きづらい」とする。仮説④および⑤が支持されれば、想起した相手の共有経験が多いほど自己概念のアクセス可能な領域が広く、共有不全経験が多いほどアクセス可能な領域が狭いために客体的自覚状態の生じ方が異なっており、想起した相手によってアクセス可能な自己概念の領域の広さが異なるということが考えられる。仮説①と合わせて考えると、相手によって現れる自己概念は、領域が異なっており、また、その範囲も異なっていることが考えられる。よって、相手によって自己が変化していると考えられる。

角田（1994）は、共有経験の高い群は私的自意識が高いという結果を見出しており、他者の感情を共有し意識するためには、それを感じる自己の感情状態についての認知も必要であると指摘している。共有経験が生じる心的過程を考えてみると、自己は他者との相互作用の中で他者と類似の感情が喚起されるが、その感情を意識できなければ共有経験とはならない（角田，1994）のである。また、共感経験が少ないということは、自己を意識するだけの他者との関わりが持てないとみることもでき、対人距離のあり方に関連がある（角田，1994）とも考えることができる。

さらに、自意識の強さや注意の向け方によって特徴的な行動様式を持つことが示されていることから、仮説⑦「変化程度が強いと自覚している人は私的自意識または公的自意識、もしくは両方の自意識が強い」、仮説⑧「意図的変化動機が強い人は公的自意識が強

い」、仮説⑨「自然・無意識動機が強い人は私的自意識とは関連が見られず、公的自意識が低い」、仮説⑩「関係の質動機が強い人は私的自意識または公的自意識、もしくは両方の自意識が強い」についても検討する。

以上より、第一の目的として、関係的自己の可変性と共感経験には関連があること、また、第二の目的として、関係的自己の可変性と自意識には関連があることを検討する。

また、自意識尺度では、私的自意識、公的自意識ともに男性より女性の方が平均点が高く、共感経験尺度改訂版では、共有経験が男性より女性の方が高く、共有不全経験は女性より男性の方が高いという結果が出ており、男女差が見られている（菅原, 1984；角田, 1994）。一般に、発達心理学や人格心理学では、男性が「個の確立」を重視するのに対し、女性は「関係性の維持」を重視するという、方向性の違いがあることが指摘されており（谷, 2010）、この影響を反映した結果だと考えられる。よって、本研究においても、客体的自覚および共感経験の男女差を考慮しながら検討を進めることとする。

方法

１．調査対象者と手続き

大学生172名（男性55名、女性117名）を対象に、2014年９月上旬に集団で質問紙調査を実施した。項目の提示順序のカウンターバランスをとるために、Situational Self-Awareness尺度および共感経験尺度改訂短縮版を回答する際に想起する母親、父親、親友あるいは一番親しい友人の順序を考慮した質問紙を６パターン作成し（例：母親→父親→親友、父親→親友→母親）、ランダムに配布した。同じ値ばかりが並んでいるデータや欠損値を含むデータ33名分を削除し、有効回答は139名（男性42名、女性97名）であった。有効回答の平均年齢は19.64歳（SD=1.27）、男女別の平均年齢は、男性が19.95歳、女性が19.51歳であった。

２．質問紙の構成

１）自意識尺度

自分自身にどの程度注意を向けやすいかを測定する自意識尺度（菅原, 1984）の21項目を使用した。２つの下位尺度「私的自意識」と「公的自意識」からなる。評定は、「１．全くあてはまらない」から「７．非常にあてはまる」までの７件法で求めた。

２）関係的自己尺度

先行研究（佐久間・無藤, 2003；佐久間, 2006）で作成・使用された尺度・教示方法を用いた。「私たちはいろいろな人との関係の中で生活していますが、そういった人間関係の中で、例えば、母親と一緒にいるときの自分、友達といるときの自分、恋人と一緒にいるときの自分などが考えられると思います。それではそれぞれの人間関係における自分の様子を思い起こして、次の質問に答えてください」という教示があり、以下の質問に回答してもらった。

(1) 変化程度　人間関係に応じて自分がどの程度変わるのかについて尋ねた。評定は、「１．全く変わらない」から「６．非常に変わる」までの６件法で求めた。

(2) 変化動機　なぜ人間関係に応じて自分が変わるのかについて尋ねる変化動機尺度（佐久間・無藤, 2003）の26項目を使用した。４つの下位尺度「関係維持」、「演技隠蔽」、「自然・無意識」、「関係の質」からなる。評定は、表現の極端さから一部改変した松下・渋川（2008）にならい、「１．そう思わない」から「５．そう思う」までの５件法で求めた。

３）Situational Self-Awareness尺度

客体的自覚を測定するSituational Self-Awareness尺度（Govern&Marsch, 2001；馬・橋本・金野訳, 2014）を使用した。「今、私は自分を取り巻く周囲の環境を強く意識してい

ます」などの９項目で、私的自覚、公的自覚、周囲の自覚からなっている。教示は「あなたは今、母親と会話をしています。その場面をイメージして、以下の二つの状況に関する質問に答えてください」とし、母親、父親、親友あるいは一番親しい友人を対象とした場面に応じて修正した。二つの状況は、性格あるいは服装のある部分について指摘されたときとした。この二つの状況は、菅原（1984）の自意識尺度の私的自意識、公的自意識の項目を参考に設定し、それぞれ私的自己客体視場面、公的自己客体視場面とする。評定は、「１．全くあてはまらない」から「７．非常にあてはまる」までの７件法で求めた。

４）共感経験尺度改訂短縮版

角田（1994）が作成した共有経験を測定する共感経験尺度改訂版（EESR）の項目を一部抽出し、修正して使用した。二つの下位尺度「共有経験」と「共有不全経験」の因子負荷量の高い順にそれぞれ５項目ずつ、計10項目抽出し、全項目の記述を「不快な気分でいる母親からその内容を聞いて、母親の気持ちを感じ取ったことがある」のように母親、父親、親友あるいは一番親しい友人の対象とした場面に応じて修正して用いた。

結果

１．各尺度の構成

１）自意識尺度

21項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、固有値と解釈可能性を考慮して２因子が妥当と判断した（Table1）。因子負荷量が.40に満たない１項目を削除し、残り20項目について再度因子分析を２因子解によって行った。第１因子は、「自分がどんな人間か自覚しようと努めている」などの９項目からなっており、菅原（1984）の私的自意識に相当するもので、「私的自意識」因子と命名した。第２因子は、「自分が他人にどう思われているのか気になる」などの11項目からなっており、菅原（1984）にならい、「公的自意識」因子と命名した。また、信頼性係数（Cronbachのα）は、私的自意識が.87、公的自意識が.90と、いずれも高い内的整合性が確認された。そこで、下位尺度ごとに項目の合計値を下位尺度得点として用いた。

２）変化動機尺度

26項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、固有値の減衰パターンと解釈可能性を考慮して３因子が妥当と判断した（Table2）。因子負荷量が.40に満たない２項目を削除し、残り24項目について再度因子分析を３因子解によって行った。第１因子は、先行研究（佐久間・無藤, 2003；佐久間, 2006）においての関係維持と演技隠蔽の「相手にきらわれたくないから」や「相手に自分をよく見せたいから」などの15項目からなっており、松下・渋川（2008）にならい「意図的変化」因子と命名した。第２因子は、「相手との関係の中で自然にそうなってしまうから」などの５項目からなっており、先行研究（佐久間・無藤, 2003；佐久間, 2006）の自然・無意識に相当するもので、「自然・無意識」因子と命名した。第３因子は、「相手によって親密さの程度が違うから」などの４項目からなっており、先行研究（佐久間・無藤, 2003；佐久間, 2006）の関係の質に相当するもので、「関係の質」因子と命名した。また、信頼性係数（Cronbachのα）は、意図的変化が.91、自然・無意識が.86、関係の質が.75と、いずれも十分な内的整合性が確認された。そこで、下位尺度ごとに項目の合計値を下位尺度得点として用いた。

３）Situational Self-Awareness尺度

母親、父親、親友を対象とした時の私的客体視場面、公的客体視場面のそれぞれ９項目ずつについて主成分分析を行ったところ、全てにおいて第１主成分に高い負荷を示した。

ただし、他の項目と比較して６つのデータの負荷量が.64、.62、.70、.71、.63、.56と、全体的に数値が低い傾向にあったため、統一して項目６を削除し、再度主成分分析を行った（Table3）。項目すべてが自己客体視に関する項目だったため、母親を対象とした時の私的客体視場面を「母親私的客体視」因子、父親を対象とした時の公的客体視場面を「父親公的客体視」因子のようにそれぞれ命名した。また、信頼性係数（Cronbachのα）は、母親私的客体視が.87、母親公的客体視が.90、父親私的客体視が.89、父親公的客体視が.89、親友私的客体視が.90、親友公的客体視が.89と、いずれも高い内的整合性が確認された。よって、それぞれの８項目の合計値を尺度得点として用いた。

４）共感経験尺度改訂短縮版

母親、父親、親友を対象とした時のそれぞれ10項目ずつについて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、いずれも固有値の減衰パターンと解釈可能性を考慮して２因子が妥当と判断した（Table4）。第１因子は、「喜んでいるときに、その気持ちを感じ取って一緒にうれしい気持ちになったことがある」などの５項目からなっており、第２因子は、「何かに喜んでいても自分はうれしい気持ちにならなかったことがある」などの５項目からなっており、それぞれ角田（1994）の共有経験、共有不全経験に相当するものであった。よって、母親を対象としたときの共有経験を「母親共有経験」因子、父親を対象としたときの共有不全経験を「父親共有不全経験」因子のようにそれぞれ命名した。また、信頼性係数（Cronbachのα）は、母親共有経験が.91、母親共有不全経験が.92、父親共有経験が.92、父親共有不全経験が.93、

Table 1　自意識尺度の因子分析

項目	Ⅰ	Ⅱ
18.他人を見るように自分をながめてみることがある	.81	-.17
19.しばしば、自分の心を理解しようとする	.78	.09
16.ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることがある	.75	-.18
15.自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	.69	-.25
20.常に、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.67	.10
12.自分がどんな人間か自覚しようと努めている	.56	.23
13.その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	.54	.22
21.気分が変ると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ	.52	.01
17.自分を反省してみることが多い	.49	.20
11.人の目に映る自分の姿に心を配る	.08	.82
９.他人からの評価を考えながら行動する	-.05	.79
１.自分が他人にどう思われているのか気になる	-.09	.79
７.自分についてのうわさに関心がある	-.15	.76
３.人に会う時、どんなふうにふるまえば良いのか気になる	.00	.74
８.人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	.02	.73
４.自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	.01	.73
10.初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう	.08	.62
６.自分の容姿を気にする方だ	.07	.53
５.人にみられていると、ついかっこうをつけてしまう	.09	.53
２.世間体など気にならない	.09	-.43
因子寄与	5.94	4.52
因子間相関		.33

Table 2　変化動機尺度の因子分析

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
24.相手に自分をよく見せたいから	.79	.00	-.04
25.相手に嫌われたくないから	.77	.01	-.01
19.自分のいいところを見せたいから	.69	.04	-.07
3.相手によって自分をどう見せたいかが違うから	.68	-.13	.11
5.相手との関係を壊したくないから	.67	-.01	.15
16.自分の弱いところを隠しているから	.64	-.17	.01
2.相手の望む自分になろうとするから	.63	-.02	-.03
7.自分の嫌いなところを隠しているから	.63	-.16	.06
23.相手の気持ちに応じるから	.60	.09	-.11
17.場の雰囲気を壊したくないから	.59	.05	.23
13.相手を傷つけたくないから	.57	.14	-.15
22.相手とうまくやっていきたいから	.56	.07	.11
9.相手に自分をより受け入れてほしいから	.53	.24	-.09
10.相手によって意識的に違う自分を演じているから	.52	-.13	-.02
14.相手に自分をわかってほしいから	.50	.21	-.14
20.相手との関係の中で自然に変化してしまうから	-.12	.88	.07
8.相手との関係の中で無意識に変化してしまうから	.00	.84	-.05
26.相手との関係の中でなんとなく変化しているから	.06	.78	-.03
12.相手との関係の中で自動的に変化してしまうから	-.03	.69	.05
4.相手との関係の中で気づくと変化しているから	.13	.41	.18
6.相手によって親密さの程度が違うから	-.08	-.02	.87
1.相手によって心を許している程度が違うから	.03	-.03	.61
21.相手によって付き合いの長さが違うから	-.18	.21	.59
18.相手によって自分の内面を見せられる度合いが違うから	.21	.05	.50
因子寄与	6.28	3.76	2.63
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ　意図的変化		.24	.14
Ⅱ　自然・無意識			.40
Ⅲ　関係の質			

Table 3　Situational Self-Awareness尺度の主成分分析

項目	対象	母親		父親		親友	
	場面	私的客体視	公的客体視	私的客体視	公的客体視	私的客体視	公的客体視
1.今、私は自分を取り巻く周囲の環境を強く意識しています		.81	.85	.80	.79	.78	.79
2.今、私は自分の内面の感情を意識しています		.66	.68	.53	.68	.76	.70
3.今、私は自分を表現する仕方について意識しています		.70	.75	.76	.74	.77	.64
4.今、私は他人にどう見られているか意識しています		.72	.82	.82	.76	.76	.78
5.今、私は周囲で何が起こっているか意識しています		.74	.76	.77	.80	.79	.77
7.今、私は他人が自分をどう考えているか気にしています		.74	.78	.81	.81	.72	.81
8.今、私は自分の心の奥の考えを意識しています		.64	.73	.59	.65	.76	.69
9.今、私は周囲の環境を取り巻くすべてのものを意識しています		.78	.76	.81	.77	.77	.79

削除項目「6.今、私は自分の人生について熟考しています」

Table 4　共感経験尺度改訂短縮版の因子分析

項目	対象 母親 Ⅰ	母親 Ⅱ	父親 Ⅰ	父親 Ⅱ	親友 Ⅰ	親友 Ⅱ
5.喜んでいるときにその気持ちを感じ取って一緒にうれしい気持ちになったことがある	.91	.02	.90	.00	.83	-.05
3.楽しさを感じ取ろうとし気持ちを味わったことがある	.90	.02	.88	-.06	.90	-.04
4.とてもびっくりしたと話すのを聞いて自分も驚いた気持ちになったことがある	.89	.02	.85	.06	.87	.02
2.苦しんでいる気持ちを感じ取ろうとし同じような気持ちになったことがある	.76	-.09	.81	-.01	.83	.04
1.不快な気分でいる気持ちを感じ取ったことがある	.60	.07	.74	.04	.72	.06
10.何かに喜んでいても自分はうれしい気持ちにならなかったことがある	-.01	.93	.02	.91	.03	.91
8.楽しい気分でいても自分は楽しく感じなかったことがある	-.03	.89	.00	.90	.03	.93
7.何かに苦しんでいても自分はその苦しさを感じなかったことがある	.02	.88	.00	.87	-.05	.90
9.とてもびっくりしたと話すのを聞いても驚いた気持ちにならなかったことがある	-.08	.87	-.09	.85	-.07	.92
6.不快な気分でいる内容を聞いても同じように不快にならなかったことがある	.14	.66	.09	.75	.09	.72
因子寄与	3.89	3.64	3.86	3.70	3.98	3.61
因子間相関		-.26		-.22		-.19

Table 5　下位尺度ごとの平均値およびSD
（N＝139）

下位尺度		平均値	SD
自意識尺度	私的自意識	4.45	1.06
	公的自意識	4.66	1.01
変化動機尺度	意図的変化	3.14	0.75
	自然・無意識	3.70	0.84
	関係の質	4.35	0.63
Situational Self-Awareness尺度	母親私的客体視	4.27	1.08
	母親公的客体視	4.04	1.19
	父親私的客体視	4.09	1.12
	父親公的客体視	3.90	1.17
	親友私的客体視	4.48	1.17
	親友公的客体視	4.23	1.22
共感経験尺度改訂短縮版	母親共有経験	4.95	1.16
	母親共有不全経験	4.12	1.38
	父親共有経験	4.42	1.33
	父親共有不全経験	4.04	1.37
	親友共有経験	5.34	1.04
	親友共有不全経験	4.09	1.42

親友共有経験が.92、親友共有不全経験が.94と、いずれも高い内的整合性が確認された。そこで、下位尺度ごとに項目の合計値を下位尺度得点として用いた。

5）各尺度の下位尺度ごとの平均値とSD

各尺度の下位尺度得点の平均値とSDをTable5に示した。

2．自己客体視と対象および性別の関連

仮説①の客体的自覚の生じ方が対象（母親、父親、親友）によって異なることを検討するため、自己客体視場面（私的客体視、公的客体視）について、対象×性別の２要因を独立変数、各場面の対象別の客体視得点を従属変数とする、２要因混合計画の分散分析を行った（Table6）。まず、私的客体視場面については、対象による合計得点において、1%水準で有意な効果が見られた（F（2, 274）=6.95, p<.01）。Bonfferoni法による多重比較の結果、親友は父親に比べて得点が高かった。また、性別による私的客体視場面の合計得点において、１%水準で有意な主効果が見られ（F（1, 137）=9.44, p<.01）、女性は男性に比べて得点が高かった。交互作用は有意ではなかった（F（2, 274）=0.37, $n.s.$）。次に、公的客体視場面については、対象による合計得点において、１%水準で有意な主効果が見られた（F（2, 272）=7.08, p<.01）。Bonfferoni法による多重比較の結果、親友は父親に比べて得点が高かった。また、性別による公的客体視場面の合計得点において、10%水準で有意傾向な主効果が見られ（F（1, 136）=3.72, p<.10）、女性は男性に比べて得点がやや高かった。交互作用は有意ではなかった（F（2,

272）=0.05, *n.s.*）。これらの結果より、仮説①は一部支持された。

また、仮説②のパーソナリティとしての自意識と客体的自覚の生じ方に関連があることを検討するため、自意識（私的自意識、公的自意識）と対象ごとの自己客体視（私的客体視場面、公的客体視場面）の関連を検討するために相関分析を行った（Table7）。その結果、私的自意識と私的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=.375（p<.01）、父親においてr=.234（p<.01）、親友においてr=.477（p<.01）といずれも正の相関を示した。公的自意識と公的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=.425（p<.01）、父親においてr=.413（p<.01）、親友においてr=.405（p<.01）といずれも正の相関を示した。よって、いずれにおいても有意な正の相関が見られ、私的自意識と私的客体視場面での客体視得点と、公的自意識と公的客体視場面での客体視得点の間には関連があるということが示された。

さらに、私的自意識、公的自意識のそれぞれにおいて男女差があるかどうか検討するた

Table 6 「自己客体視」得点に対する対象（3）×性（2）の2要因混合計画の分散分析の結果

	母親	父親	親友	*F*値		
		平均（SD）		対象	性	交互作用
私的客体視場面						
男性（42名）	34.81（11.93）	33.29（12.05）	35.31（12.55）	6.95***	9.44***	n.s.
女性（97名）	39.11（ 8.20）	37.81（ 8.76）	41.25（ 8.90）	親友＞父親	女性＞男性	
公的客体視場面						
男性（42名）	33.26（12.54）	32.10（11.43）	34.81（12.07）	7.08***	3.72*	n.s.
女性（97名）	36.32（ 9.15）	35.14（ 9.69）	38.28（ 9.04）	親友＞父親	女性＞男性	

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

Table 7 自意識と自己客体視場面の相関係数

	私的客体視場面			公的客体視場面		
	母親	父親	親友	母親	父親	親友
私的自意識	.375**	.234**	.477**			
公的自意識				.425**	.413**	.405**

** $p < .01$

Table 8 「自意識」得点の男女別の一要因分散分析の結果

		平均（SD）	
私的自意識	男性	38.93（11.05）	主効果n.s.
	女性	40.59（8.18）	
公的自意識	男性	48.00（14.42）	主効果 F（1,138）=4.75*
	女性	52.62（9.95）	

* $p < .05$

Table 9 「共感経験」得点に対する対象（3）×性（2）の2要因混合計画の分散分析の結果

	母親	父親	親友	*F*値		
		平均（SD）		対象	性	交互作用
共有経験						
男性（42名）	22.76（7.05）	20.36（7.36）	25.45（6.01）	38.42**	7.28**	n.s.
女性（97名）	25.58（5.01）	22.82（6.24）	27.27（4.73）	母親、親友＞父親	女性＞男性	
共有不全経験						
男性（42名）	20.45（6.77）	19.76（7.64）	20.10（7.10）	n.s.	n.s.	n.s.
女性（97名）	20.69（6.98）	20.41（6.51）	20.61（7.14）			

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

めに、性別を独立変数、私的自意識、公的自意識の得点を従属変数とした一要因分散分析を行った（Table8）。その結果、私的自意識において主効果は有意ではなかった（F（1, 138）=.97, $n.s.$）。公的自意識においては、5%水準で有意な主効果が見られ、女性は男性に比べて得点が高かった（F（1, 138）=4.75, p<.05）。

３．共感経験と対象および性別の関連

仮説③および仮説④の共感経験の生じ方が対象および性別によって異なることを検討するため、共感経験の下位尺度（共有経験と共有不全経験）のそれぞれを従属変数とした対象×性別の２要因を独立変数とする、２要因混合計画の分散分析を行った（Table9）。まず、共有経験については、対象による合計得点において１％水準で有意な主効果が見られ（F（2, 274）=38.42, p<.01）、Bonfferoni法による多重比較の結果、母親、親友は父親に比べて得点が高かった。また、性別による共有経験の合計得点において、1%水準で有意な主効果が見られ（F（1, 137）=7.28, p<.01）、女性は男性に比べて得点が高かった。交互作用は有意ではなかった（F（2, 274）=0.43, $n.s.$）。よって、仮説③は支持されなかった。次に、共有不全経験について、対象及び性別による合計得点は、主効果は有意ではなかった（F（2, 274）=0.37, $n.s.$;F（1, 137）=0.18, $n.s.$）。交互作用も有意ではなかった（F（2, 274）=0.07, $n.s.$）。よって、仮説④は支持されなかった。

４．対象による自己客体視と共感経験の相関分析

仮説⑤および仮説⑥の共感経験の持ち方と客体的自覚の生じ方に関連があるかどうかを検討するため、対象ごとの共感経験（共有経験、共有不全経験）と自己客体視（私的客体視場面、公的客体視場面）の関連を検討するために相関分析を行った（Table10）。その結果、共有経験と私的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=.377（p<.01）、父親においてr=.341（p<.01）、親友においてr=.330（p<.01）といずれも正の相関を示した。共有経験と公的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=.302（p<.01）、父親においてr=.301

Table 10　対象による自己客体視場面と共感経験の相関係数

		共有経験			共有不全経験		
		母親	父親	親友	母親	父親	親友
私的客体視場面	母親	.377**			-.022		
	父親		.341**			-.079	
	親友			.330**			-.004
公的客体視場面	母親	.302**			-.138		
	父親		.301**			-.238**	
	親友			.404**			-.019

** $p < .01$

Table 11　相関の有意差検定のCR値

共有経験 私的客体視場面	母親—父親間	0.44	共有不全経験 私的客体視場面	母親—父親間	0.65
	母親—親友間	0.54		母親—親友間	0.20
	父親—親友間	0.12		父親—親友間	0.75
共有経験 公的客体視場面	母親—父親間	0.01	共有不全経験 公的客体視場面	母親—父親間	1.20
	母親—親友間	1.16		母親—親友間	1.32
	父親—親友間	1.14		父親—親友間	2.21

Table 12　変化程度および変化動機と自意識の相関係数

変化程度	意図的変化	自然・無意識	関係の質	親友
私的自意識	-.050	.234**	.184*	.207*
公的自意識	-.048	.637**	.145	.191*

* $p < .05$, ** $p < .01$

（p<.01）、親友においてr=.404（p<.01）といずれも正の相関を示した。共有不全経験と私的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=－.022、父親においてr=－.079、親友においてr=－.004といずれも有意ではないが負の相関が見られた。共有不全経験と公的客体視場面での客体視得点との間の相関係数は、母親においてr=－.138、父親においてr=－.238（p<.01）、親友においてr=－.019と、母親と親友においては有意ではなかったが、いずれも負の相関が見られた。また、これらの相関係数の間に差があるかどうか相関の有意差検定を行ったところ、共有不全経験と公的客体視場面との間の相関係数の父親と親友との間でのみ有意差が見られた（Table11）。よって、いずれにおいても有意な正の相関が見られている共有経験と両客体視場面での客体視得点との間には関連があり、それは対象によって差はないことが示され、仮説⑤は一部支持されたと考えられる。一方、共有不全経験と公的客体視場面での客体視得点との間で見られた父親の有意な負の相関は、母親との差はないが、親友との相関係数との間には差があることが示された。これらの結果より、仮説⑥は支持されなかった。

５．変化程度および変化動機と自意識の相関分析

仮説⑦、⑧、⑨、⑩の自覚している自己の変化程度および変化動機（意図的変化、自然・無意識、関係の質）とパーソナリティとしての自意識（私的自意識、公的自意識）との関連を検討するために相関分析を行った（Table12）。その結果、変化程度は、私的自意識および公的自意識との間において有意ではなかった（r=－.05,*n.s.*；r=－.05,*n.s.*）。よって、仮説⑦は支持されなかった。意図的変化は、私的自意識との間でr=.23（p<.01）、公的自意識との間でr=.64（p<.01）のそれぞれ正の相関が見られた。よって、仮説⑧は支持された。また、自然・無意識は、私的自意識との間でr=.18（p<.05）の正の相関が見られ、公的自意識との間においては有意ではなかった（r=.15,*n.s.*）。よって、仮説⑨は支持された。関係の質は、私的自意識との間でr=.21（p<.05）、公的自意識との間でr=.19（p<.05）のそれぞれ正の相関が見られた。よって、⑩は支持されたと考えられる。

考察

本研究の目的は、大学生の関係的自己の可変性に与えている要因として共感経験との関連を検討することと、関係的自己の可変性に与える個人差として自意識との関連を検討することであった。

１．関係に応じる自己の変化および性差

私的客体視場面、公的客体視場面のそれぞれにおいて、父親よりも親友に指摘を受けた時の方が客体視得点が高いという結果が得られた。このことから、「父親が相手の時よりも母親や親友に指摘を受けた時の方が、自己に注意が向きやすい」という仮説は一部支持されたと判断できる。親友に服装や性格を指摘された場面を想起した際の客体視得点が父親よりも高かったのは、自己概念のアクセス可能な領域に、服装や性格に関する知識や過去の経験が、会話の中においてなど、何ら

かの形で含まれていたからであると考えられる。父親に服装や性格を指摘された場面を想起した際の客体視得点が親友よりも低かったのは、自己概念のアクセス可能な領域に、服装や性格に関する知識や過去の経験が乏しかったからであり、父親への自己開示が低い（榎本,1987）などの大学生における父親との関係性が影響していると考えられる。自己概念のアクセス可能な領域は、想起する相手によって全く異なっているのか、重なり合っているのかは本研究において検討はできないが、本研究の結果は、現れている自己概念の領域は異なっており、自己が異なっているということを示唆するものであると考えられる。関係に応じて変化する自己のことを検討してきた従来の研究では、相手によって自己が変化することが暗黙の了解となっていたために、自己の可変性の程度などに着目した研究がほとんどで、実際に関係に応じて変化しているのかということはあまり検討されてこなかった。よって、関係に応じて自己が変化するということを実証的に示すものとなった。しかし、両客体視場面において父親と母親の間に差が見られず、両者の違いを明確にできなかった。これは、自己概念のアクセス可能な領域に、服装や性格についての知識や過去の経験が同程度存在していたと捉えることができるであろう。よって、服装や性格についての指摘という刺激だけでなく、違いを見出せるような刺激について検討を進める必要がある。

また、私的自意識と各私的客体視場面での得点、公的自意識と各公的客体視場面での得点に関連が見られていることから、「パーソナリティとしての私的自意識が高ければ、私的客体視場面で自己に注意が向きやすく、公的自意識が高ければ、公的客体視場面で自己に注意が向きやすい」という仮説は支持された。さらに、私的客体視場面および公的客体視場面において、男性よりも女性の方が客体視得点が高いという結果が得られた。本研究では、男女差は公的自意識のみに見られたものの、菅原（1984）において、私的自意識、公的自意識ともに男性より女性の方が平均点が高いという結果が出ており、私的自意識と各私的客体視場面での得点、公的自意識と各公的客体視場面での得点に関連が見られていることから、客体視得点が男性よりも女性の方が高いという結果は妥当であると考えられる。

２．関係に応じる共感経験および性差

共有経験においては、父親より母親、父親より親友の方が得点が高いという結果が得られた。また、従来の研究と同様に、男性よりも女性の方が得点が高いという結果が得られた。交互作用が見られなかったことより、「共有経験においては、女性は、父親に比べ母親や親友の方が共有経験が多く、男性は、母親に比べ父親や親友の方が共有経験が多い」という仮説は支持されなかった。男女間での母親および父親との関係性の違いを考慮した上での仮説であったが、本研究では、こうした関係性は見出せなかった。父親よりも母親や親友の共有経験の得点が高かったということは、父親においては過去にその相手の立場になって感情を体験している経験がほかの対象に比べ少ないということであり、その傾向は女性だけでなく、男性においても同様であると考えられる。

共有不全経験においては、母親、父親、親友の間で得点の差はなく、男女間でも差がないという結果が得られた。交互作用も見られなかったことから、「共有不全経験においては、女性は母親や親友に比べ父親の方が共有不全経験が多く、男性は、父親や親友に比べ母親の方が共有不全経験が多い」という仮説は支持されなかった。共有経験同様に男女間での母親および父親との関係性の違いを考慮した仮説であったが、こうした関係性は見出

せず、本研究では、他者の気持ちがわからなかったという経験自体に母親や父親、親友の間に差がないということが示された。他者の気持ちがわからないという経験は、意識されにくい経験であることが考えられ、そのために母親や父親、親友の間に差が出なかった可能性がある。

３．関係に応じる自己の変化と共感経験の関連

共有経験において、私的客体視場面、公的客体視場面での得点との間でそれぞれ関連が見られ、相関係数は母親、父親、親友によって差がないことから、対象に関係なく共有経験が多ければ多いほど私的客体視場面、公的客体視場面での得点が上がるという関連があるという結果が得られた。さらに、Table6より、私的客体視場面、公的客体視場面において父親より親友の方が得点が高いこと、また、Table9より、共有経験において父親より母親や親友の方が得点が高いことを加味すると、「共有経験が多い対象ほど自己に注意が向きやすい」という仮説はある程度支持されたと判断できる。過去の共有経験が多ければ、それだけ知識や過去の経験として自己概念のアクセス可能な領域に蓄積されるため、服装や性格について指摘されたとき、仮定ではあるが、自己概念のアクセス可能となっている領域は広く、その中に服装や性格に関する知識や過去の経験が含まれている可能性が高いということが考えられる。このことより、想起した相手との共有経験が多ければ、現れる自己概念の領域は広く、共有経験が少なければ現れる自己概念の領域は狭いと仮定することができ、現れている自己概念の領域は異なっており、自己が異なっているということを示唆するものであると考えられる。また、共有経験が多いということは、過去にその相手の立場になって感情を体験している経験が多いということであり、その相手の立場になって想像することがより容易となることも、自己に注意が向きやすい要因と考えられる。しかし、共有経験が少なければ、性格や服装について指摘されたとしてもその相手の立場になって想像することができないので、自己に注意が向きづらいと考えられる。しかし、共有経験では差が見られた父親と母親において、客体視得点では差が見られなかった。このことから、父親と親友のように共有経験と客体視得点が明確に対応する場合もあるが父親と母親のように明確ではない場合もあり、共有経験だけでなく、他に客体的自覚に影響を与えている要因が存在することが示唆された。

共有不全経験においては、私的客体視場面での得点との間ではいずれの対象でも関連が見られなかった。公的客体視場面での得点との間では、父親のみ関連が見られ、相関係数は母親とは差がなかったため関連の強さは変わらないと考えられるが、親友とは差があったため、親友の共有不全経験と公的客体視場面での得点の関連よりも父親の共有不全経験と公的客体視場面での得点の関連の方が強く、共有不全経験が多ければ多いほど公的客体視場面での得点は低くなるという結果が得られた。さらに、Table6より、私的客体視場面、公的客体視場面において親友および一番親しい友人より父親の方が得点が低いこと、Table9より、共有不全経験において母親、父親、親友の間で得点の差はなかったことを加味すると、「共有不全経験が多い対象ほど自己に注意が向きづらい」という仮説は支持されなかったと判断できる。ただし、共有不全経験において対象の間に得点差はなかったものの、公的客体視場面において親友より父親の方が得点が低いこと、親友の共有不全経験と公的客体視場面での得点の関連よりも父親の共有不全経験と公的客体視場面での得点の関連が強く、共有不全経験が多ければ多いほど公的客体視場面での得点は低くなるとい

う関連が見られていることから、他者の気持ちがわからなかったという経験は、母親、父親、親友で差がないが、そのそれぞれの気持ちがわからなかったという経験に対し、父親では特に外面への注意が向きづらいということがわかった。他者との共有経験が得られない共有不全経験は、個としての自他の区別をはっきりと主体に認識させる（角田,1994)。父親は共有経験において母親や親友より得点が低く、過去にその相手の立場になって感情を体験している経験も少ないため、自他の区別がよりはっきりと認識されていることが、客体視得点が低いという結果につながったと考えられる。

４．自意識と変化程度および変化動機の関連

変化程度と私的自意識および公的自意識との間において、関連がほぼないという結果が得られた。よって、「変化程度が強いと自覚している人は私的自意識または公的自意識、もしくは両方の自意識が強い」という仮説は支持されなかった。自己に注意が向きやすいというパーソナリティ特性を持っていることにより、対人関係において自己が変化している程度が強いと自覚しているわけではないことがわかった。一般に、自己に注意が向きやすい人はそのときの状況をつかみやすいため相手による自己を変化させていると考えられている。今回の結果は、自己に注意が向きやすいパーソナリティ特性を持っていても変化程度が強いと自覚しているわけではなく、変化程度が弱いと自覚する人の存在も示唆しており、自覚する変化程度は多様であることを示すものとなった。

一方、意図的変化と公的自意識との間においてやや強い関連、私的自意識との間において弱い関連があるという結果が得られた。このことから、「意図的変化動機が強い人は公的自意識が強い」という仮説は支持されたと判断できる。公的自意識は、他者から見られる自己についての意識であるため、他者からの評価を意識した対人行動を取る傾向にある。よって、他者との関係に気を配る関係維持の動機や、弱みである部分を隠して自己を表現しようとする演技隠蔽の動機を含む印象操作的な動機である意図的変化との関連が見られたと考えられる。また、私的自意識は、自己の内面的側面に注意を向けやすい傾向である。私的自意識と意図的変化との間に関連が見られたのは、私的自意識が高い人は自分自身の知覚をより正確にできるために、理想や基準から逸脱した自己を自覚し、行動によって自己を理想や基準に近づけようとするために、少なからず印象操作的に自己を変化させているからであると考えられる。よって、両自意識に注意が向きやすい人ほど相手によって呈示する自己を変化させていると言えるであろう。また、自然・無意識動機においては、私的自意識との関連があるという結果が得られ、「自然・無意識動機が強い人は私的自意識とは関連が見られず、公的自意識が低い」という仮説は支持されなかった。私的自意識が高い人は、先述したように基準から逸脱した自己と行動そのものに関心を持つため、基準から逸脱しない限り意図的に呈示する自己を変化させることは少ない。よって、意図的ではなく自己が変化する、変化の動機を意識したことがない、自分でもよく説明ができないなどの場合も含まれる自然・無意識動機と関連が見られたということが考えられる。自然・無意識動機において公的自意識が低いという関連が見られなかったのは、公的自意識が高く他人からの評価を意識した対人傾向にあっても、意図的変化のような動機を自覚しているとは限らず、自然・無意識動機を選択しており、関連が見られたということが考えられる。関係の質動機においては、私的自意識および公的自意識との間に関連があるという結果が得られた。このことから、「関係の質動機が強い人は私的自意識または公的

自意識、もしくは両方の自意識が強い」という仮説は支持されたと判断できる。関係の質動機は、立場や親密さを考慮している動機であり、やや意図的な変化の意味合いを含んでいる。私的自意識と関連が見られたのは、私的自意識が強ければ基準から逸脱した自分と行動に関心を持つという傾向から、自分の中に相手との親密さや心を許している程度の基準が存在しており、その基準に従って行動しているからであることが考えられる。公的自意識と関連が見られたのは、先述したように他者からの評価を意識した対人行動を取る傾向にあるため、相手との親密さや心を許している程度を意識しながら行動しているためと考えられる。

５．全体的考察と今後の課題

以上より、全体的な考察を行う。本研究の第一の目的は大学生の関係的自己の可変性に影響を与えている要因として共感経験との関連を検討することであったが、関係に応じて自己が変化することを実証した上で、共有経験と客体的自覚の関連を見出せた。共有経験が多い親友や母親は、共有経験が少ない父親よりも内面、外面どちらに対しても自己に注意が向きやすいことが示されたことから、共有経験の蓄積の程度により異なった自己概念が現れていることが示唆され、関係的自己の可変性と共有経験には関連があることが示された。しかし、共有不全経験は関係的自己の可変性と関連があることは示されなかったことから、今後の検討が必要であると考えられる。

第二の目的は、関係的自己の可変性に影響を与える個人差として自意識との関連を検討することであった。自己に注意が向きやすい人は関係に応じて自己を変化させており、その変化を自覚していると考えたが、自己に注意が向きやすければ自覚している自己の変化の程度が高い、というパーソナリティ特性と関係に応じて自己が変化している程度の自覚は関連が見出せなかった。しかし、自意識と意図的変化や自然・無意識、関係の質動機などで関連が見られていることから、関係に応じて変化する自己の動機の背景に自意識というパーソナリティ要因が存在していることが示唆された。本研究では、実際の自己の変化の程度を用いるに至らず、自覚している自己の変化の程度との関連を検討したにすぎない。よって、今後、実際の自己の変化の程度を測定したものを用いることができれば、自意識との関連について異なる知見を得られるだろう。

<付記>

本論文作成にあたり、ご指導を頂きました今川民雄先生、佐藤祐基先生、調査にご協力くださいました学生の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

Buss, A.H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco, Calif. : Freeman.

Carver, C.S., & Humphries, C. (1981). Havana daydreaming : A study of self-consciousness and the negative reference group among Cuban-Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 545-552.

Curtis, R.C. (Ed.) (1991). *The relational self*. New York : Guilford Press.

Duval, S., & Wicklund, R.A. (1972). *A theory of objective self-awareness*. New York : Academic Press.

榎本博明 (1987). 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について　心理学研究, 58, 91-97.

Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.

Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness :

Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.

Govern, J.M. & Marsch, L.A.（2001）. Development and validation of the situational self-awareness scale. Consciousness and Cognition, **10**（3）, 366-378.

角田豊（1991）. 共感経験尺度の作成　京都大学教育学部紀要, **37**, 248-258.

角田豊（1993b）. 臨床的に見た「共感」の再検討　鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）, **8**, 77-87.

角田豊（1994）. 共感経験尺度改訂版（EESR）の作成と共感性の類型化の試み　教育心理学研究, **42**, 193-200.

Kelly, G.A.（1955）. *The psychology of personal constructs*. New York Norton.

Linville, P.W.（1985）. Self-complexity and affective extremity: Don't put all your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.

馬思維・橋本敬・金野武司（2014）. 外国語使用における客体的自覚と適応行動の低下　知識共創, **4**, 3, 8.

Markus, H., & Kitayama, S.（1991）. Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

Markus, H., & Wurf, E.（1987）. The dynamic self-concept: A social psychological perspective. In M.R. Rosenzweig & L.W. Porter（Eds.）, *Annual review of psychology*. **38**, CA: Annual Reviews. pp.299-337.

松下姫歌・渋川瑠衣（2008）. 大学生における関係的自己の可変性に関する研究―Connected-SelfおよびSeparated-Selfの観点から―　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部（教育人間科学関連領域）, **57**, 151-158.

佐久間路子（2000）. 多面的自己―関係性に注目して―お茶の水女子大学人文科学紀要, **53**, 435-451.

佐久間路子（2002）. 大学生における関係的自己の可変性の理解：変化理由と変化意識に着目して　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, **4**, 85-94.

佐久間路子（2006）. 幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達　風間書房

佐久間路子・無藤隆（2003）. 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連　教育心理学研究, **51**, 33-42.

Scheier, M.F.（1980）. Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 514-521.

菅原健介（1984）. 自意識尺度日本語版作成の試み　心理学研究, **55**, 3, 184-188.

谷芳恵（2010）. 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感：共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連から　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**（2）, 21-26.

山本彩留子・岡本祐子（2008）. 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ、対人態度の関連性　広島大学心理学研究, **8**, 107-120.